網羅的遺伝子発現解析およびタンパク発現解析による小細胞肺癌の予後因子についての検討

濱中　和嘉子[1)]，石川　雄一[2)]，岩﨑　昭憲[1)]

[1)] 福岡大学医学部　呼吸器・乳腺内分泌・小児外科
[2)] がん研究会がん研究所　病理部

要旨：小細胞肺癌は形態学的に小型腫瘍細胞より構成され，機能的には神経内分泌性を持つ肺の悪性腫瘍であり，特に予後不良な組織型として知られている．しかし集学的治療により長期生存する症例や，一般に有効とされる化学・放射線療法に治療抵抗性を示す症例などもあり，多様性に富んでいる．以前，我々は網羅的遺伝子発現解析により小細胞肺癌の予後良好群の抽出が可能であることを示した．今回は別の手法による網羅的遺伝子発現解析を行い，予後良好群では神経内分泌関連の遺伝子発現が弱い事を確認した（p=0.0014）．さらに３種の神経内分泌マーカーと２種の基底細胞マーカーを用いて，蛋白発現と予後および臨床病理学的特徴との関連について検討を行った．基底細胞癌は形態的に小細胞癌に類似しているが，性質は異なる腫瘍である．その結果，予後良好群では神経内分泌分化に関する遺伝子群の発現および神経内分泌マーカーの発現が低下しており，神経内分泌マーカーが予後因子となることが判明した（p=0.026）．一方，基底細胞性の有無では予後は不変であった．

キーワード：小細胞肺癌，遺伝子発現解析，マーカータンパク発現，予後因子